金沢詩乃五行歌集

桜

前書きのみですが

前回の「渇」とは同じ時期の作品から選歌した今回の歌集は、当時の生活や日常がテーマになっている。
当時は当時でかなり追い詰められてはいたが、こうして改めて見直してみるともう少し賢く立ち回れた気がしないでもない。
あの日々で失くした分の得たものの姿はまだよく見えてこないけれども、前回の歌集を公開した際静かながらも反響はあったのでたぶんその中から生まれて来るような気もする。
きっとどこかで、同じ砂漠をひとりきりで歩き続けている誰かの目に留まることを願いつつ。

１２月最後の日曜日に
金沢詩乃

おんなぐらし

雑誌

ブラジャー

何でも掴める足の指

不精道

ここに極まれり

くらしは
見栄も
女の性も
剥ぎ取っていく
下着だけ残して

わたし、今
引き出しなら
何段目かな
乱雑のはみだす
真ん中へんかな

半裸で
ビールを飲む
わたしに
優しいなぁ
扇風機の風

なにげに
髪をかきあげる
ように
決める　捨てる
受けて立つ

女の戦いこそ
仁義なんか
ない
カレー鍋
淡々とかき混ぜつつも

なしくずしな
わが本棚
聖書のとなりに
川端康成と
「無職生活マニュアル」

着物姿を
林芙美子みたい
と言われ
空っ風に瞳
泳がせてみる

吊るされている
ポトスと
わたし
お互いゆらゆら
街暮らし

永久の伴侶も
探さず
今週も
ロト6のマスを
丁寧に埋める

さびしさなんか
知らぬふりして
厚顔の
シミやシワに
嘆いてみる

傷ついたときに
じんわり効く
誰かからもらう
飴とか
チョコとか

でもやっぱり
好きな人に
好かれたい
一膳の飯椀に
こびりつく思い

血脈

憧憬は
見知らぬ父の
ふところに
置いてきて
それっきり

金の無心を
断った時の
そう・・・
の声に
身を切られる

電話の前で
立ちすくむ私の
足元に
渦巻くコンセント
絶てぬ血脈

垣間見た
人生の
薄暗さ
隅でごろ寝する
母の愛人

合わない靴
ばかり
履いてきたんだろう
我が道を
行きながらも

修羅場か
シュールか
滑稽か
当時の十才には
親の色恋などわからん

「そんな親なんか捨ててていい」
最近言われて
気付いた
ずっと誰かから
言われたかった台詞だと

有難う
母よ
あなたの奔放さに
私は鍛えられ
他人様はこんなにも優しい

レシートの
裏側
らか

転んだついでに
自分の
居場所
確かめる
手

督促状の束に
目もくれず
一気に
夕餉をむさぼる
泣く

逃れられぬ闇も
流れていたから
飛び込んで
死ねなかった
川

自分の
甘さに
泣いて泣いて
泣いてきた
それだけの自負

眠りながら
泣けば
閉じた瞼から
つうー、と彼方へ
私ごと流れゆく一片

お金の無い日は
馬鹿に
なって
からっぽの歌を
大声でうたう

汗のにおいがする　ビルの
生きた　朽ちた裏側の
ことばを　窓辺
発しながら　鳩がそっと
働く　羽をやすめて

帰りには
新しい
マフラーを買おう
簡裁への道
急ぎながら

まぁ女性なら
化粧品代も
上乗せときましょ
と調停委員
減資のやりくり

内の内まで
ひび割れさせ
耐えてきた
七年
ドサッと床に置く

空っぽの
両手に
さびしいもんだ
失うもののない
強さなんて

朝を踏む

素足で
朝を
踏めば
ひんやりと
また一日は始まる

腑に落ちぬ事も
理不尽も
踏んづけて
ぶつぶつと
偏平足

口当たりのいい
言葉を
信じない
わたしの
直球内角攻め

捨てられずにいる
色えんぴつ
夢の名残は
とりどりの
淡さで

吹きこぼれた
鍋の
火を消す
その静けさ
身につまる

きっと最期の晩餐も
まぁ
カレーに
しとくかと
芋の皮なぞ剥いてる気がする